抜粋版

振興会ニュース

第 8 号

1 9 9 8 年 1 月

日本バスケットボール振興会

目　　次

○　秋季役員会の概要－活発な自由討議－ …… 1

○　理事会の概要－規約改正・役員関係等－ …… 9

○　会員からの一言 …… 13
池田　博　　今泉　正一　　小沢　正博　　寺田　生男

○　第19回アジア男子選手権大会報告（亀倉宏一）…… 16

○　振興会規約改正 …… 19

○　平成10年度主要競技日程 …… 22

○　事務局だより …… 23

会員からの一言

振興会の全国組織化を

顧問
池田　博

冨士理事長の勧めで振興会に加わってから約2年経ちました。会の掲げる目的のうち、「会員相互の親睦を図る」ことについてはほぼ達成されていると思いますが、「普及発展のための助成」については甚だ心許ないものを感じます。

96年2月の理事会で、助成事業の積極化・充実化を目指して社団法人化を検討することが決定されました。その後の経過は不分明ですが、会の性格や活動内容からして、簡単に認可がおりるとは思えません。仮に認可されたとしても、協会でなく振興会の方に寄付を仰ぐ理由を理解して頂けるでしょうか。

現在、助成活動の財源確保のために、地方を含めた会員増が図られておりますが、遅々として進まないのは残念なことです。

バスケット界にあっては、全国津々浦々に熱心なOBや関係者が多数おられる筈です。

アジアの盟主の地位を取り戻して欲しい、オリンピック出場の常連になって欲しい、メジャースポーツとして復活して欲しい、何か後押しできないものか。…これら共通の熱い思いを抱く全国の愛好者の声を1つに結集することは、大変意義あることと考えられますので、この際、振興会の全国組織化を考えては如何でしょうか。元来普遍的活動であるべき振興会活動が関東地区に偏在し、しかも日本．．．の名称をを冠していることにも疑問があります。

一口に全国組織化と言っても、これは大事業に違いありません。OBと関係者による唯一の親睦団体であるだけでも十分存在価値があるとは言え、どこかで本当の勢いをつけないと感傷的親睦団体に終わってしまうかも知れません。

貧者の一灯ではあっても、ミニやママさんへの助成金は協会の現場の方に大変感謝されており、灯の数を大幅に増やすことが求められます。

会員増に当たっては会費に見合うだけの上質な情報サービスの提供が不可欠です。

プレーヤーや指導者には、技術向上に役立つ資料を有料で提供することも考えられます。

それらの検討は後日に委ねるとして、田舎住まいで世間知らずの戯言かも知れませんが、大方の諸賢のご検討をお願いできれば幸いに存じます。

公認審判審査委員会と審判部会の問題について

顧問
今泉正一

最近、耳にする事柄の中で気になると言うのか、よく理解できない問題は公認審判審査委員会（以下委員会と言う）と審判部会（以下部会と言う）に関してである。

各々の役割と関係について立場的に逆ではないかと思うことと、各々の役割が本当に機能しているのだろうかと言う2点である。

第1に委員会に関してだが、確か去年（平成8年）からA級審判の育成を各ブロックに任せると言うことが、新聞で報道されたことは周知のことであろう。

それによってブロックの委員会の組織化を推進することとなり、各ブロックでは既に組織化されている筈である。

ところが、部会では各ブロックに芯から任せたのではなく、審判の育成はブロックに委ねても、審査は部会の指導委員会から派遣された講師が中心に、ブロックの委員会と、あくまでも話し合いで決めるつもりでいると言うことも耳にした。

一体、これはどうなっているのだろうかと誰もが真意を知りたく思うところであるが、委員会はどう対応しているのかも大切な問題点ではないかと思う。

そもそも委員長が退任し、次の委員長の選出から、副委員長の選出に至る経緯も定かでなく、一般の人達にすれば疑問が広がる一方であろう。

次に筋論から考えると、ブロックの委員会に先立ち、各都道府県協会内にも委員会組織が確立されて、その代表者がブロックに集まり、その中から全国的組織の構成メンバーを決めて行くのが順序だと思うが、この点もよく判らないところである。

これらの問題点から、冒頭で述べた様に、役割機能が部会と主客転倒ではないかと言うことであるが、その責任は委員会活動自体が貧困であるが故ではないかと言う疑問もある。

いずれにしても、本来の委員会機能の見直しから、部会との関係の修復をしないと、理想的な審判の育成にはつながらないのではないだろうか。

もう一方では、他国では設けられているテクニカル・コミッテーを日本でも設ける時期が来ているのではないかと言う意見も耳にするが、日本協会は考えているのだろうか。

第2に部会に関してだが、先に述べた委員会の在り方に疑問はないのだろうかと、不思議に思うのは私だけではないだろう。

邪推だが、委員会が十分な機能を発揮することは、

部会にとっては脅威となり、このままで適当な委員会であればいいのかも知れない。しかし、それでは審判の技術向上や育成は本当に良くなるとは思えないが、如何なものだろうか。

去年（平成８年）から今年にかけて、審判の技術が変化していると言うことを耳にしているが、何でも基本的なことで４原則を中心に指導した来たことが、いい方向に向いて来たらしいが、これはいいことである。

どんなにプレイが変化しても、基本は不変のものであるから賛成であるし、今後も指導・育成の面で忘れないで欲しいものだと願っている。

さて、前項の委員会のところで述べたことだが、Ａ級審判の育成問題と審査問題で全国に誤解を招いた様だが、部会の真意をもう一度はっきりと全国に伝えるべきではないだろうか。聞くところによると『そんなつもりではなかった』と言うことの様だが、将来的なことはそうなのだろうが、それまでの段階があり、一気に行く筈がないのだから、言葉足らずだったのだろうと善意に解釈するものの、訂正することはしっかりと訂正しなければ、行政能力を問われることは当然であろう。

この問題と同じ様な問題が、もう一つある。

周知の問題ではあるが、ＪＢＬの専属審判制度の問題でも某新聞社に書かれてしまった様だが、この問題に関しても曖昧だと言える。

部会の姿勢や真意はどうであったのか、その後はどうなっているのかも定かでなく、世間だけでなく、審判仲間からも疑問や文句があった様で一般人には尚更訳が判らない。

聞くところによると、新聞社が部会の意向も確認せずに掲載した様だと言うことだが、これも前項の問題と同じで、真実を何故、早急に発表しないのかと言うことである。

この問題は、日本の審判育成の根本的土壌を大きく変える大問題であり、大袈裟かも知れないが、審判界の歴史を塗り替える問題であり、もっと慎重に検討しなければならない問題だと思うが、如何なものだろうか。

そもそも、日本の審判の構図は各都道府県協会のしかも各加盟団体等から誕生してきていることを考えると、軽率にことを運んではならない問題であった筈だが、これも何故、早急に訂正をしなかったのかと言う、部会の行政能力問題であり、真に残念である。

今からでも遅くはない。いや、この原稿が世に出る時には訂正もしくは説明が全国になされているかも知れないが、もし、そうでなければ早々に発表（説明）をして欲しいものである。

私の聞いたことが間違っているかも知れないが、以上の様なことを耳にしたので老婆心ながら是正及び反省を促したいものである。

バスケットの話題性を世間へ

顧問
小沢正博

現在、日本リーグが開催されている最中である。しかしながら、その結果が新聞に掲載されるのは得点の記録だけで、試合内容や話題については、めったに報道されない。

お正月の全日本選手権も含めて、記事として掲載されるのは決勝戦の結果位である。

テレビにおいては増してはの感があり、一般的な地上局の中継放映は年に１、２回程度の有り様。バスケットボールが好きな私達にとってみては、なんとも情けない限りである。なぜなのか？

数年前、協会の広報部長を拝命した小生にとって永久的な課題ともいえる。当時何人かの記者の方にお伺いしたことの受け売りになるが、マスコミが大きく取り上げるのはなんといっても、その話題性だという。

昨今のように情報が巷に溢れているなかでは、ありふれた内容の記事では人々は目を向けない。珍しいことや、意外性のあることに人々の関心が集まることとなる。

関心が集まれば次は実際に会場に行ってみようにつながる。俗に言う観客動員となる。

そこで私が提案したいのは、みんなでこの話題性の掘り起こしに挑戦してみようということである。自分が活動するあらゆる場所で、バスケットの話題を振りまくのである。

ミニバスから始まる日本のバスケット人口は相当な数に昇るはずであり、これらのバスケットマンが口々にその話題性をふりまけば、きっと成功すると思う。

先にＷＮＢＡで活躍したジャパンエナジーの萩原選手がテレビや新聞に大きくとりあげられたのも、その話題性であろう。本人は一人でアメリカに留学して大変な苦労もあったと思うが、彼女はひとつの話題を日本のバスケット界に提供してくれた。

サッカーがＷ杯出場の話題盛んなりし頃、全日本の男子チームがアジアで２位となり、数十年振りにバスケットのＷ杯出場を果たしてくれたが、マスコミの報道はほんのわずかであった。サッカーの方が話題性があったのだと思う。

私達はマスコミを待っているのではなく、積極的にバスケット会場に足を運び話題性を見つけだして世間にばらまく努力をしてはどうか。

みんながこのことを実行すれば、やがて居ながらにしてバスケットの話題が自分達に提供される日がくると思う。

「超OBバスケット」を語る

顧問
寺田生男

バスケットをこよなく愛する50才以上の、元選手や役員たちの集いを「超OBバスケット」と称している。

平成９年は８月１７日「みちのくの小京都、角館町」で開催され、第16回目を迎えるに至った。

そもそもの始まりは、戦後間もない昭和21年、施設の子供たちに「心の灯」をとのささやかな願いから、秋田市に進駐して来た米軍との親善試合に子供たちを招待して、プレゼントを贈るというボランティア活動のスタッフたちが、紅白戦や、中学生を相手にボールを追っかけたのが始まりだった。それが昭和50年頃には、県北、県南からも参加するようになった。（秋田市バスケットボール協会主催で進駐軍撤退後は青森の三沢米軍ジェットチームが協力、今年で52回目を迎える。）その後、昔のプレーを懐かしむ仲間達の間で、12月のＸマス祭とは切り離して、会場も三地区持ち回りの会を誕生させるべく話しが進み、昭和57年８月８日、県南六郷町で第１回目を開催したのである。

会の中味を少し紹介したい。まず堅苦しい組織はなし、連盟会長は置かず、開催地の長老が会長格となる。日中の第１部はゲームなので、集合は11時、全員“おにぎり”で腹拵え、12時開会、リーグ戦に入る。勝敗に拘らず、“生涯バスケットマンとして、健全な老化を目指そう”をモットーに、和やかなムードいっぱいの中、県南は緑、県北は白、中央は赤と色とりどりのユニフォームに身を包み、懐かしい感触で、胸を熱くしながら、ボールを手にする。

第１クォーターは65才以上、第２クォーターは60才以上、第３クォーターは55才以上、第４クォーターは50才以上と年齢規制をし、出場不可能な選手は、フリースロー大会（ハーフタイム時に12名ずつの対抗戦）に参加する。

ゲーム終了後は、温泉で汗を流し、浴衣姿で、第２部、夜の懇親会に入る。（毎年参加者全員宿泊、今年は80人だった）。成績発表、優勝杯贈呈（持ち回り）、三地区長老の挨拶のあと、次回開催地長老の音頭で乾杯、年１回の集いは、無礼講そのもので大いに語り合う。日本バスケット界は勿論のこと、国際バスケットに至る幅広いバスケット談義等々、さすが「バスケット王国」らしく話題は尽きることない。時間の経つのが惜しまれた。

さて、秋田県バスケットボール界の隆盛は故池上喜八郎先生を忘れて語ることは出来ない。先生は、昭和17年９月東京文理科大学卒業後、秋田県師範学校に赴任されたが、１週間後に兵役に服し、昭和20年復職されてから昭和23年10月秋田を去るまでの間、物資調達の大変な時代だったのに、自費で教範を作成し、正しいバスケットを全県に普及ご指導下さったのである。

同時期に関四郎先生も在職され、秋田県バスケット界は、非常に恵まれていた。

平成５年８月14日、第12回超OB大会（八郎潟ハイツ）に長野市在住の池上先生ご夫妻をご招待申しあげた。教え児達を始め、当時の選手達と楽しい一夜を過ごし、再会を期してお別れしたのが最後となってしまった。平成７年12月11日ご逝去なされたのである。翌年超OBバスケ第15回大会を記念して、教え児達が中心となり追悼祭を秋田市で開催、ご冥福を祈念したのである。秋田県のバスケットはすばらしい先輩、指導者に恵まれ、後輩に引継いで居るからこそ、現在の王国があると言えよう。これまで以上に「超OBの集い」を大事にして行きたいと思っている。

第19回アジア男子選手権大会報告

日本バスケットボール協会広報部　亀　倉　宏　一

1997年９月７日から９月21日までサウジアラビア・リアド市にて開催のアジア男子選手権大会にチームと帯同し広報担当業務を行って来ました。

出発前から各報道機関等と綿密に打合せを行い、現地での作業について抜かりのないよう準備した。観光客の入国を禁止しイスラム教の厳しい法律で取り仕切られているサウジアラビアのリアドへ入国して初めて感じた事は、男女の差別が非常に厳しい事である。

空港は立派で驚いたが、チェックが大変厳しかった。（スーツケースは全員が中を開けて点検された）帰路の空港はＸ線探知機が３倍に強くされていて、殆どの人が何回も引っ掛かってなかなか通過出来ない。道路は片側３車線で完全に舗装されていて、夜間は道路の街路灯が明々と点灯していてとても美しかった。ホテルのある市内は大きな建物や建築中の建物が連立し、まさにこれから発展する街という感じがした。私たちが泊まったりリヤドパレスホテルが選手村になり、大会が始まってからメディアルームが出来た。食事は心配していた程ではなく、バイキング方式で種類が豊富で結構美味しく食べる事が出来た。ただしアルコール類は一切無く（聞いていた事はホテルには置いてあるとの事）期間中は完全に禁酒でした。

40°を超える猛暑の中、小型マイクロバスと乗用車に分乗して30分程かけて練習会場へ向かう。日中は５分も外に出ていると皮膚がピリピリして来る。湿度が無いため汗はあまりかかない。標高差が 800メートルくらいある為と時差の関係で選手達は初日はバテ気味であった。

毎日選手と一緒に食事を採り、練習に同行し、先乗りビデオ撮影班と同行して自分なりに後で対戦するチームの分析等を行って、資料を作ったり写真も何本も写した。

試合は夕方から行われるため、ホテルへ戻ってから試合結果及び戦評、監督談話等を書きＦＡＸを送る。

現地より直接東京の共同通信社・時事通信社へコレクトコールで送信する事になって居たが、利用出来ない事が判明し、直接日本協会へ送信し日本協会よ

り各社及び関係部門へ報道してもらう事とした。

時差が6時間ある為、夜中の2時3時になっても何とか間に合うので安心した。

私と同じようにホテルから自国へＦＡＸを送信している人が何人か居たが、聞いてみたら中国・韓国・チャイニーズタイペイの新聞記者とテレビの関係者との事でした。

翌朝には地元紙（アラビア語）3部、英字紙2部が無料でメディアルームに用意されていて、無料で戴く事が出来た。地元紙1面には試合結果が大々的に掲載してあったが、やはり写真等を同時に送る事などこれから考える必要がある。会場内はフロアに記録を作成するＡＢＣプロモーションの担当者が、地元の人に指導しながら作成していたが、どこの国でも大変な作業である。

小さな部屋が沢山あり、競技・広報などそれぞれの担当に分けられていた。又軍隊・警察による会場の警備が厳重に行われており、王様の観覧席はガラスの囲いで別に仕切られていた。

試合に関しては日本チームが韓国に勝利した時には、ヤッターという感じで非常に興奮した。近年なかなか破る事が出来なかったが、久しぶりに勝利出来た事が本当に嬉しかった。続いて地元サウジアラビアに勝利し、来年のギリシャで開催される世界選手権大会に31年振りに出場出来る事になった。（女子はドイツで開催）

決勝戦は中国を破った韓国と再度対戦し、僅か１ゴールの点差で敗れたがひいき目に見て日本が勝っていた。全体的に見ると日本・中国・韓国を除いたアジアのチームはアメリカ人のコーチを招いて着々と力を付けて来ているので用心が必要と思われるし、たえず目の上の敵である中国・韓国の動向をキャッチしておく事も必要ではないだろうか。

最後に広報担当として、各種大会に同行したり、情報をキャッチしたり、発信したりして居りますが、まだまだ認知されていない部分がある為、いかにバスケットボール界がメジャーになることが出来るかを模索しています。

これからもＯＢの皆様のご支援とアドバイスご協力を賜りたいと思っております。

訃　　報

顧問　島原大三朗氏は平成９年11月８日に逝去されました。

長年にわたり日本のバスケットの普及のため、協会、実連、ミニの役員として、また本会の発展のため、多大のご盡力を賜りました。

ここにつつしんで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申しあげます。